

やすらぎ



「歎異抄」(第四十四回)

標 暁 講述

「歎異抄」第十八章

一 仏法のかたに、施入物の多少にしたがいて、大小仏になるべしということ。この条、不可説なり、不可説なり。比興のことなり。まず仏に大小の分量をさだめんことあるべからず。そううや。かの安養浄土の教主の御身量をとかれてそううも、それは方便報身のかたちなり。法性のさとりをひらいて、長短万円のかたちにもあらず、青黄赤白黒のいろをもはなれなば、なにをもつてか大小をさだむべきや。念仏もうすに化仏をみたてまつるということのそつろなるこそ、「天念には大仏をみ、小念には小仏をみる」(大集經意)といえるが、もしこのことわりなんどにばし、ひきかけられそううやらん。

(真宗聖典六三八頁)

『歎異抄』は前序の次に、師訓十ヶ条が有り、その十条の中に中序が含まれている。その後十一條から十八條まで異義八ヶ条というものがある。異義八ヶ条というのがまずは先師口伝の真信に異なることがまとまるのだと、唯円大徳が示されている。

それを徳川時代の末に妙音院了祥という三河の学僧の方がこの八ヶ条というものを一つにわけることが出来た。「なんじは誓願不思議を信じて念仏もうすか、また名号不思議を信ずるか」のところ。それから専修賢善というのは懸命に念仏して、悪い心をおこさない様にして、良い心をおこすという。そうしなければたすからないのだというはからいを専修賢善という。常識では当たり前だが、仏法は常識ではない。いかに反省をしても、立派な心をおこす様にしても、我々凡夫は縁次第では悪い心をおこす。宿業の我が身とはそういう事。

光照寺寺報

発行所
真宗大谷派 弘興山
宗教法人光照寺
〒331-0821
さいたま市北區別所町102-2
電話：048-651-2781代
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://koshoji76.jp
発行人 池田孝郎

そういう自覚を持って本願をたのむ、たのむとは真のよりどころとする。自分で良い心をおこし、悪い心をおこさない、いかにも立派な様だけれども、そういうところで我々は救済されるのではない。もし、そういうところが救済ならば悪い心をおこしたら救済されないことになる。

そういう我が身なのだ深く知ってそして本願をひたすらたのむ、これが我々真宗門徒の精神生活。

親鸞聖人のみ教えによれば我々の帰依する仏は、誰でもいつでもどこでもどんなところでも称えられる南無阿彌陀仏という言葉になった仏。親鸞聖人が拝んでおられた本尊は四つある。帰命尽十方無碍光如来、南無不可思議光如来、南無阿彌陀仏、南無不可思議光仏。

十字、九字、六字、八字、南無阿彌陀仏の意味をあらわしている。掛軸は御本尊として安置はしてあるけれども、本当の御本尊はわたくし

花まつり本堂にて



甘茶かけ

が称える南無阿彌陀仏。南無阿彌陀仏によつてわたくしの妄念が翻つていくはたらきが南無阿彌陀仏。そのはたらきを色々なかたちで表現しているのが絵像とか木像という。ですから『蓮如上人御代記聞書』をみると、他宗では「名号よりは絵像、絵像よりは木像」他宗では木像のほうが位が上だというのが、真宗では反対である。とにかく南無阿彌陀仏という言葉となつて我々にはたらきかけ、我々を目覚ましてくれる仏を御本尊。大仏なんて造る必要が無いのです。だけど大きな仏像のほうが立派な仏様だと私達は思う。これは人間の常識です。だからその常識を破つてあるわけです。真宗の教えは。

(当寺)法話抜粋要約、文責副住職 釈徹照 次回へ続く

孟蘭盆会法要 八月九日 厳修

詳細は三頁

詳細は三頁

む げ こう 無 碍 光

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

この度は戦後七十年目にあたり「戦争と平和」とは何かの大テーマを掲げ、限られた紙面で考えてみたいと思います。

戦後七十年は日本の敗戦だけではなく、日独伊の三国同盟によって勃発された、第二次世界大戦の終結から七十年目の年でもあるのです。

深い悲しみと共に、「戦争とは」「平和とは」の根源に遡って考えて見たいと思います。

元ドイツの大統領ヴァイツゼッカーの有名な言葉として、「過去に目をつぶる者は、現在に対してもやはり盲目となる。」でありましょう。

この言葉にはナチスドイツのウシュヴィッツのユダヤ人大量虐殺、及び、占領していく過程の敵味方の殺戮の悲劇を指しての言葉でありましょう。日本もその悲劇の轍を踏んでいることです。

人間は何故戦争するのでしょうか。そこには「利害」と「覇権」の相剋に「正義」を互いに立て争ってしまふものでありましょう。

歴史を振り返って見ますと、皆戦争の歴史と云っても過言ではないでしょう。民族とか、思想とか、宗教とかの違いで戦争が起きると一般的には理解されている様であります。もともと根本を尋ねれば、「エゴ」の一点に帰着いたします。人間の本来持っている「エゴイズム」「自己中心性」にあることです。「個人のエゴ」は分かるでしょうが、この「エゴ」を拡大していくと、「家族エゴ」、「組織エゴ」、「国家エゴ」、「民族エゴ」、「思想エゴ」、「宗教エゴ」等々、皆、この「エゴ」に収斂いたします。その「エゴ」に「正義」を立てるのですら容易ではありません。

現在の現実の事象、現象のみではこの「エゴ」の正体はなかなか自覚されないものであります。それは、「自分に都合が良ければ善として、自分に都合が悪ければ悪とする自己存在」であるからです。

このことは、「自己を自己と認識

する以前の自己形成をも因としてある問題が内在している根本問題があるからです。今日的には「教育の問題」もあります。戦前と戦後の教育のあり方」でも違います。又、「民族に伝承されて来た、倫理・道徳・法規範」でも違います。勿論、そこには「宗教」の違いも内在します。もともと云えばそれを越える思想・哲学の相違によっても違ってくる来ます。

「思想・哲学・宗教を超える普遍的な真理」を人類は発見しているのでしょうか。今日の科学では「D・N・A」の遺伝子解読により、生命発生時点からの進化が解読され、その応用も「I・P・S細胞」によって臓器も再生可能となっています。又、世界的科学者のアーヴィン・ラズロ著の「生ける宇宙」によれば、「宇宙には意志があり、情報があり、記録されている」とまで断言しているのには驚きであります。「自己とは何か」、「エゴとは何か」、「戦争とは何か」を問わなければならない二十一世紀の今日の我々です。

人類は平和を願い、幸福を求め戦争をして来た有史以前の存在でした。弥陀の本願は一切衆生を救うと誓っておられます。

般舟讃に、「敬いて、一切往生の知識等に白さく、大きに須らく慚愧すべし」と。誠に慚愧、懺悔の他ありません。

南無阿弥陀仏。

真の依り処

信心とは大変むづかしいものと善知識が教えて下さいました。人は人としてどうにもこうにもならない切つて捨てることの出来ない根深い問題をひきずりながら生きて歩まねばならぬ身をもつています。いつ何が起るか分からないところで生かされていますが、先頃私の身がぎざまれる程とても辛い悲しい別れに遇いました。絶望感に打ちのめされ空気が稀薄に感じ脈拍も超高になり、生きる苦しさをもがきながら、悲しみが身の奥深いところからしぼるようにわきあがり、涙が涙腺がこわれたかのようにふき出す。これが私なのだ宿業因縁の私なのだ悲しみの身を通し、悲しみに身をふるわせながら教えを聞かしていただくことが如来様より賜わった信心なのでしょいか。

南無阿弥陀佛
岡田ノリ子

鈴の音

一人ひとりが
それぞれの存在の
意味をもって
存在しておる

藤元正樹
〔地上に立つ宗教〕

お盆



お笑い芸人ゴルゴ松本の「命の授業」の講演が好評を博し、本も出版されています。少年院で講演したりして感動を引き起こしているそうです。内容は、漢字の意味を自己流で解説した熱い内容のようです。無難な人生なんてない。誰にだって苦難・困難・災難は起きる。嫌なことが起きない人生なんてありえない。苦難・困難・災難が起る人生、無難の反対の人生はなんて書く？「有難」嫌なことが起ることを「有難し（ありがたし）」っていうんだ。（二部

引用）このような形で様々な漢字を熱く解説して説いているようです。

「有難い」という言葉は教えに基づき仏教各宗派もたくさん説教で説いてきたのでしょうか。又、漢字の意味解説は仏教では象形文字から説く説教もあります。私達は普段漢字を使いながらその意味成り立ちをあまり意識しないで使用します。漢字や熟語には背景があつて、ドラマや物語があります。先人の「苦勞の賜物です」。

仏教には音字語がありますが、インドの語源に尋ねたり、漢訳の意味に尋ねたり、様々な角度で命のみ教えの源泉を尋ねていきます。そのひとつがウランバナ（盂蘭盆会・漢訳では倒懸。亡き人を偲び、ご一緒にお念仏申しましょう。

お盆法要は二部制にて厳修致します。多数のご参詣をお待ちしております。

副住職（釈徹照）

盂蘭盆会法要

・8月9日（日）

第一部（午前）9時30分受付

午前 10時～11時30分まで

第二部（午後）1時受付

午後 1時30分～3時30分まで

・光照寺本堂にて

・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数と午前か午後の参詣をご連絡下さい。預骨、初盆の方は率先してお参り下さい。また、どなたでもお参りできます。真宗のお盆に触れて下さい。ご参詣をお待ちしています。

お盆参り

・7月13日から16日の期間

・8月 1日から16日の期間
（9日は除く）

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。時間につきましては、こちらで調整して連絡させていただきます。ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

子供会報告

子供会「ボニークラブ」
花まつり＆いちご狩り

坊守 池田 邦子

今年は開花宣言から間もなく、桜花爛漫となり報道では外国人観光客がここかしこに登場して交流の輪がへだてなくひろがり、日本のお花見文化が人気をとり定着しつつある様です。当寺では四月一日（水）大人十名、小人八名の参加を得て花御堂のお釈迦様に甘茶をかけてお誕生をお祝いしました。本堂と当寺の貴重な一本の桜の木を背景に記念撮影後、西区のストロベリーハウス細田さんへ移動して、お腹いっぱいいちご狩りを楽しみました。あいにく小雨となりお寺に戻りスタッフ達のもり沢山の手作りの昼食を頂きました。絵本「おしゃか様」を陽子さん



銅像前にて



いちご狩り



ごはん美味しかった



公園にて

ひとくち 歎異抄

羅漢：人間は敵味方と分かれても救

われるのか。

「一切の有情は、みなもつて世々々々の父母兄弟なり。」第五章



「人間の善悪・敵味方、正邪、愛憎、利害を超えて、皆、過去世からの父母兄弟です。」

川越喜多院の五百羅漢

が読み聞かせて下さいました。有意義な楽しい時間を過ごす事が出来ました。次回は、夏休み中の八月二十一日（金）に予定しております。参加御希望の方はお問い合わせ下さいませ。合掌

お知らせ

寺務所より

◆法要のご案内

●孟蘭盆会法要 八月九日(日)、午前

午後二部厳修。

●秋季彼岸会法要 九月二十三日(水)

午後一時三十分より厳修。

●報恩講 十一月一日(日)午前十一時

より厳修予定。

◆光照寺護持会総会

六月二十一日(日)アトラクションもあり

ます。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

休講中。

●大経の会

七月四日、九月六日、十月二十四日、午

前十時～午後三時まで。講師は佐々木

師と住職の担当月別。細川巖著『正信

偈讃仰』(五)を学んでいます。お弁当持

参して下さい。

●我聞の会

七月十七日、九月十八日、十月六日、午

後二時～四時まで。講師は住職。『真宗

の簡要』(住職著)、サブテキスト『無量

寿経に聞く』(松原祐善著)を学んでい

ます。

●微風学会

毎月開催。六月二十六日、七月二十一

日。午後七時～九時まで。講師は副住

職。『顕浄土』の教学・親鸞における現

生不退の視座・サブテキスト「今日の

ことは『真宗の生活』を学んでいます。

●さいたま親鸞講座

午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋

ビル。八月八日、十月十日、十二月十二

日、講師は四衢亮氏。

◆お願い

●ご自宅で法事の際は駐車場をご用意

下さい。宜しく願ひします。

住所・電話番号変更の際は必ずご連絡

下さい。

俳句・川柳



吉澤 光昭

足ひたす登山靴を磯に脱ぎ

懺悔にはむかぬ大いさ夏の月

若鮎や歯形鋭く川藻食む

山田 恒

砂上の楼閣八十にして崩れ去る

花冷えの氷川の杜にでる懺悔

釈 義深

老いたれど春迎えたり今年又た

妻病みて若き日の如優しけり

なによりも頼りになるは我が子なり

短歌(詩)



佐藤 セツ子

伊弥彦の一の鳥居の脇に住みし叔父逝

きてより四月となりぬ

木目込みの小さき兜をかざりたり男

兜の居ない五月の床に

雪のせてしただれ桜の美しく仙台の孫に

幸あれと祈る

夜中まで話のつきぬ青年となりて頼も

し訪ね来し孫は

大切に育て来し夫の菜園に野鳥の群

れて根こそぎついばむ

佐々木 玄吾

LEDウオッシュレットに新畳いずみ

会館新装成れり

三月に植えしジャガイモ四月には青々

と伸び心榮しき

赤秀 品枝

無明なる心の痛む一言に「そこが念仏」

師の声ひびく

これからはご近所さんとおつきあい

笑ってしゃべって声かけあつて

篠原 潤子

大谷寺の阿弥陀如来の石仏や夫と娘

ここに共に拝みて

茅ヶ崎の奉公先の奥様の遺影の笑顔

百合のはな花

娘にひかれ十年ぶりの海外に紙オムツ

はく確と杖もつ

娘の友と香港夜景夢のよだそびえたつ

ビル人多すぎる

杖もちて香港の街みて歩く足腰按摩

娘にたのむ夜

帰る日の香港空港大ゲンカ娘の手をつ

ねる大バカの母

娘の気持やさしい心わかるのにすぐカ

ーッとなる愚か者我

梵鐘



山田 邦興 画

「孫を仏前に導くことができるのは年寄りである。孫のいない人は他人の孫でもない」とは先師の言葉である。いずみ会館子ども会はそんな願いから始まって五年が過ぎた。四月の子ども会は、多摩動物公園への遠足である。新一年生の子ども四名を含んで子どもが九名。それを見守る大人は十三名。子どもよりも大人が多いのは、念仏の子になつてほしいという大人の願いのあらわれである。動物園は坂道ばかりである。一年・二年の子は坂道を走っている。八十歳代の私達夫婦も杖をつきながら一緒に歩いた。

佐々木玄吾